都留文科大学研究紀要　第68集（2008年10月）
THE TSURU UNIVERSITY REVIEW, No.68（Oct. 2008）

反骨の教育家　評伝　長崎太郎 Ⅵ

A Critical Biography of NAGASAKI Taro (Part Ⅵ)

関口安義
SEKIGUCHI Yasuyoshi

弟、次郎の活躍

長崎太郎が時代の緊迫感の募る中で、京都大学の学生課長として苦闘していた時、弟、長崎次郎も出版業長崎書店の経営に苦心していた。すでに述べたように次郎は兄、太郎の三歳年下である。青年時代の次郎は、太郎の世話になることが多かった。

次郎は土佐県立第三中学校時代の一九一二（大正元）年、受洗を決心したものの父文之助の反対に会い、思いとどまるという体験をしていた。翌一九一三（明治四五）年、次郎は中学校を卒業寸前、前の安芸教会牧師で大阪東教会に転じた百島操牧師の勧めで、札幌の農学校で学ぶことを決意する。そこで次郎は中学校卒業とともに兄を頼って上京、はじめ井川恭と共同生活をしていた長崎太郎の本郷弥生町の下宿に入り、やがて兄とともに新装成った小石川上富坂の日独学館の一階八畳の間に寄宿した。この頃の長崎次郎は、新資料の『向陵記　恒藤恭　一高時代の日記』（大阪市立大学、二〇〇三・三）にしばしば登場する。

日曜に長崎君兄弟と千住から船にのつて、江北であがつて荒川づゝみの花をみた。花は、うこん、紅、もゝいろ、うす紫、白と華麗であつたが、風がひどくて心がおちつかなかつた。
（一九一三・四・一二）

九時すぎ制服にきかえ、芥、藤岡君と次郎さんと四人づれで出かける。雨でみちがわるい。神保町でのりかえ五番町で下りてゆく。カンカランカランと十時の鉦がなり出したので、いそいで東郷坂の教会へゆくと、自動車や馬車が輻輳してゐた。そ

こにハ、式部官のやうな服装をした、大使館の役人がたつてゐた。（一九一三・六・一五）

日独学館にいつた。二階のへやにはいつて整理をした。次郎君と一しょに風呂ではなしをした。（一九一三・九・七）

右の文中の「芥」というのは、芥川龍之介のことである。一高時代の芥川は、親しい仲間から「アクタ」と呼ばれていたのである。藤岡君とは、言うまでもなく後年の哲学者藤岡蔵六である。次郎は、一九一二（明治四五）年六月の高校受験に備え、日独学館に兄太郎と同居しながら勉強をした。が、この年の入試に次郎は失敗、翌年目的を果たすことになる。大学は東北帝国大学農科大学（のち北海道帝国大学農学部）である。そこでは作物学教室に所属し、雑草の研究で卒業論文を書いている。後年彼は「雑草生」と称したが、それは北大での専攻をもじってのことであった。

長崎次郎が農科大学（のちの北海道帝国大学農学部）に学んだのは、一つは旧師百島操の影響であった。すでに述べたように百島はトルストイアンの牧師であり、クラークの影響の残る北大への進学を強く勧めたのである。そのため元来文学志望の青年が、自然科学の道を選ぶこととなった。次郎は、在学中の一九一六（大正五）年十月、北辰日本基督教会（現、日本キリスト教会札幌北一条教会）に於て、若き高倉徳太郎牧師から受洗する。以後、終生彼はキリストの教えのもと、その生を全うすることになる。

北大を卒業した長崎次郎は、一九二一（大正一〇）年四月、横浜共立女学校の教頭として赴任する。ミッションスクールのこの学校は、彼の質に合わなかった。形骸化したキリスト教教育にあきたらなかったのである。そこで二年ほどして、やはりミッションの関東学院中等部に転じている。同じ教頭職での招聘であった。が、そこも二年ほどしてやめてしまう。管理主義の学校勤めは、自由人の彼の性に合わなかったのである。

一九二五（大正一四）年四月、長崎次郎は東京の早稲田大学前で古本屋をはじめる。それまでせっせと集めた本を元手としての開業であった。古本屋長崎書店の創業である。もともと彼は小中学校時代から本好きで、長崎次郎と古本屋との縁は、浅からぬものがあった。そのことは兄太郎の生い立ちにかかわって、併記する形ですでに記したところである。中学校を終えて上京したころは、兄、太郎の友人井川恭に連れられて、森川町の古本屋を一軒一軒見てまわったこともある。井川は次郎に「学生が古本を買えて、古本が売れないでは一人前とは言えない」などと諭されたという。古本屋時代の長崎次郎の顧客には、佐藤緑葉をはじめ生田春月・嘉村礒多・山田嘉吉らがいた。古書販売と並行して、次郎は出版にも手を染めるようになる。

この間、長崎次郎は一九二八（昭和三）年四月から一九三四（昭和九）年三月まで、再び関東学院中等部の教頭として勤めることとなる。古本屋と売れない本を出版するだけでは、生活できなかったからである。このころの次郎のことは、秋山憲兄（のりえ）の「長崎書店とその時代」（『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社、一九八四・一〇）にくわしい。以下、次郎の当時のことは、秋山のこの文章に負うところが大きい。

ところで、一九二四（大正一三）年三月、イギリス留学から帰国

した次郎の信仰の師、高倉徳太郎は大久保百人町の自宅を開放して教会（のちの戸山教会、現、信濃町教会）を発足させた。長崎次郎は創立間もないこの教会に加わり、役員となる。北海道時代に高倉から洗礼を受けた次郎は、高倉にある優れたものを見出していた。生涯の師として兄事するだけのものがあることを、彼は強く感じていたのである。

一九二六（大正一五）年十一月、戸山教会の建築費の一助にと次郎は、高倉徳太郎の説教集『恩寵と召命』を刊行した。長崎書店の処女出版であった。この本の奥付に長崎次郎は、「自らの想いを述べて世に問ふ力なき者は、他の力ある人の有意義なる書を出版することによつて満足せざるを得ない。出版は私の事業であり、私に許されたる社会への務めである。おし切つて言へば、私の人格である。これが世に対する責任はかかつて刊行者にあることを記して置く」とのことばを書きつけている。

続いて翌一九二七（昭和二）年十月には、高倉の名著とされる『福音的基督教』を刊行した。恩寵宗教としてのキリスト教を説いたこの本は版を重ね、神学書としては日本で最大の発行部数を記録し、長崎書店の代表的出版物の一つとなった。さらに翌一九二八（昭和三）年から一九三一（昭和六）年までに、高倉の『神の愛と神への愛』『祈祷の戦場』『決断的信仰』『基督教世界観』などを次々と刊行し、その執筆活動を支援することとなる。高倉が東京神学社や日本神学校の教授や校長として、学問的にすぐれた著作を刊行し、神学者としての活躍が出来たのも、長崎次郎の出版活動の支えがあってのことであった。このことは、いくら強調してもよいことなのだ。

長崎次郎がキリスト教出版に本格的に取り組むのは、一九三三（昭和八）年に父母の遺産を兄の太郎と分け、自分の分を処分してまとまった金を得てからのことである。赤字出版の『柏井園（かしわいえん）全集』続篇五巻と別巻『基督教史』がここに成る。柏井園は高知県出身の伝道者であり、のち明治学院教授として植村正久主筆の『福音新報』の編集を手伝い、自らも執筆した。次郎は郷里の信仰の先輩である柏井の著作に親しんでいたのである。柏井は東京神学社の教頭として、また『文明評論』の編集者として苦労を重ねていた。特に一九一七（大正六）年一月に同誌に掲載された田川大吉郎の「方法を知らぬ民」が当局の忌諱にふれ、柏井は禁固二か月（執行猶予二年）の判決を受け、東京神学社の教頭をやめるという事件があった。次郎は柏井のその後のきびしい経済生活への同情もあって、あえて引き受けた出版であった。長崎次郎は一九三四（昭和九）年から一九三五（昭和一〇）にかけて、『柏井園全集』続篇に全力を傾倒、その完成に励んだ。

一九三四（昭和九）年四月三日、長崎次郎の恩師高倉徳太郎が激務から鬱を発し、自死するという事件があった。次郎は大きな衝撃を受ける。高倉没後直ちに全集の刊行が企てられると、次郎はその出版を引き受けることになる。これまた採算に合わない困難な事業であった。が、一九三六（昭和一一）年五月刊行を開始し、翌年十月に全十巻を完結している。四六判、各巻平均六〇〇ページの本は、初版千部、巻を重ねるに従い、売れ行きは減少し、売り上げ回収率は悪くなり、多額の赤字を残した。

長崎書店は神学書を刊行する一方で、救癩運動の一環として患者たちの作品刊行を引き受けていた。次郎自身のことばによれば、「昭和四年、東京府下ノ癩療養所全生病院ニ北海道大学ノ学友林文

雄氏ノ赴任ニヨリ、病友達ノ作品刊行ヲ引受ケル機会ガ与エラレ、昭和十三年マデニ関係書類十二種ノ出版ニ与ルコトガ出来タ」（口述「長崎次郎略歴」『福音と世界』一九五四・一一）という状況であった。たまたま同様の事情から引き受けた小川正子の『小島の春』がベストセラーとなり、ここに長崎書店はキリスト教出版社として確固たる財政的基盤も整うことになる。

『小島の春』は、女医小川正子の長島愛生園でのハンセン病患者救済の記録である。小川正子は一九〇二（明治三五）年三月二十六日、山梨県東山梨郡春日居町（現、笛吹市）の生まれ。県立甲府高等女学校卒業後、二十一歳にして医師を志し、東京女子医学専門学校に学んだ。卒業後、東京市立大久保病院で細菌学と内科を、さらに東京賛育会で小児科を実習し、一九三二（昭和七）年から瀬戸内海の島にある国立癩療養所、長島愛生園に勤務し、ハンセン病患者の救済に生涯を捧げた。彼女は熱心なクリスチャンであり、当時不治の病とされたハンセン病患者の検診活動に従事した。『小島の春』は、その救済情況を随筆風の活動記録としてまとめたものだ。

『小島の春』の初版は、一九三八（昭和一三）年十一月である。長島愛生園の光田健輔（みつだけんすけ）園長の救癩四十年を記念するための出版であったという。初版はわずか五〇〇部、採算のメドの立たない出版であった。当時長崎書店に勤務していた中山良馬に、「『小島の春』出版の頃」（『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社、一九八四・一〇収録）という文章がある。その一節を引用させていただく。

『小島の春』を出すに当たっては救ライという祈りこそこめられていたが、経済的にはいささかの期待も持てなかった。しかし、これが長崎書店にとって旱天の慈雨となったのは確かである。そしてこの出版は、ひとり長崎書店をして名あらしめたばかりでなく、埋もれていたキリスト教出版社の存在を世に宣明したものである。思えば無名の一女医の救ライの体験記が、また波模様の襖紙を配して装丁したこの小冊子が、忽ち当時の群書を圧して二二〇版、二二万冊を数えるに至るとは誰もが予想しなかったことである。これは実に長崎書店に起死回生の機運をもたらしたと言えるものであるが、この華やかな出版の陰にあったいくつかの事柄を知る人は少ないであろう。そもそもこの原稿が長崎書店に持ちこまれたのは、中央公論社はじめ二、三の出版社を経たあとであった。商魂逞しいこの世の業者は、ライに関する記録などには目もくれなかったのである。出版の依頼をうけた長崎先生は、すでに『星かげ』『東雲のまぶた』『雑林』等、数種のライ者の文集を発行していたが、そのいずれもが売行不振でいつまでも倉庫の片隅に眠っていた。したがってこの『小島の春』にも到底成算が立たなかったが、「善きことはなさざるべからず」を信条とする長崎先生は、ただ救ライのためにとこころよく引きうけたのであった。だが、ひとたび『小島の春』が世に出るや、ライに対する関心は日を遂うて高まり、ライ者のための献身を申し出る者も少なくなかった。爾来、この病の予防と治療に一層の努力が注がれ、病者の数も激減し、やがて皆無の日も訪れるであろうということであるが、国家のため真に喜びにたえない。またライ文学にも少なからぬ刺激を与え、創元社の『いのちの初夜』や山雅房の『傷める葦』なども多数の読者を得たのであった。

長崎書店は『柏井園全集』に続く『高倉徳太郎全集』の赤字出版で、次郎は郷里の家屋敷を売った資金まで全部使い果たしていた。中山良馬によれば、『小島の春』の出版は同郷の友、建築家の中村匠からの三千円の支援によるという。幸い当初の売行きはまずまずであった。次郎は宣伝に工夫をこらし、勝負に出た。出版に宣伝がいかに大事かを彼は知っていた。また、それまでの出版で得たノーハウが生きたのである。やがて小林秀雄の推奨の辞に続いて、東京発声映画会社が豊田四郎監督、夏川静江主演で映画化するという幸運が重なり、『小島の春』は爆発的人気をよび、版を重ねた。

秋山憲兄は先の「長崎書店とその時代」に、『小島の春』のヒットに関しての次郎の「摂理」という文章を紹介している。初出誌など明記されていないものの、次郎の気持ちがよく現わされた文献であるので、さわりの部分を引いておこう。次郎は言う。「キリスト教出版に召されて立ったもののいつでも不信仰からその困難をかこちつづけて来た私である。神は荒野のイスラエル人にマナを降し、うずらを与え給うように、またエリヤを烏をもって養い給うたように、思わぬところに備え給うたのである。昨年の暮、一縷の望みを嘱していた『小島の春』が、当分の間、また損失のつづくキリスト教出版への資材を供給してくれるという結果を斎した。一〇年以上もライ友たちへの仕事をつづけて来たら、今度はそのことから思わぬ祝福を受け、その方面への幾分の御奉仕も出来、同時に本業の出版にも備えられるということになった」と。

重ねて引くが、中山良馬の「『小島の春』出版の頃」によると、長崎次郎はこの時の利益を独占せず、「沖縄にライ者のための寮を寄付し、また作者小川正子氏の郷里に療養のための住居を建ててその労に報い、その他の収益はすべてキリスト教書の出版に投入して産をなさずいつも無一物であった」という。小川正子は『小島の春』を出した後、結核が悪化し、療養を余儀なくされていたのである。なお、正子は一九四三（昭和一八）年四月二十九日に逝去した。

長崎書店はそれまで百点ほどの書籍を出版してきたが、社員は長崎次郎ただ一人であった。人件費をかける必要がないからこそ、やってこられたといえよう。秋山憲兄や中山良馬らの入社は、『小島の春』によって社の経済的基盤が固まった後のことである。

以後長崎書店は、P・T・フォーサイスやカール・バルトなど福音的神学書の訳書を出版するほか、日本人神学者の著作の刊行に助力した。桑田秀延『基督教神学概論』、浅野順一『旧約神学の諸問題』なども長崎書店刊行の書物である。また、一般書籍の刊行にも力を注いだ。平井恒子の『明日の女性』、今泉みねの『名ごりのゆめ』、杉本鉞子の『武士の娘』など、女性の著者の発掘も長崎次郎の手になる。

中でも杉本鉞子の『武士の娘』は、注目されてよい出版であった。この本は、太平洋戦争最中の一九四三（昭和一八）年六月に刊行された。原本は英語であったが、大岩美代（英文学者で『正宗白鳥論』の大岩鉱の妻）が翻訳した。越後長岡藩の筆頭家老の家に生まれ、アメリカで生活することとなる一人の女性の自伝である。当時交戦国であった国の文化を評価する著作でもあることを考えると、奇跡に近い出版であった。

近年『武士の娘』は再発見される傾向にあり、多田建次『海を渡ったサムライの娘杉本鉞子』（玉川大学出版部、二〇〇三・七）など、本書を高く評価する本も出るようになった。が、当時にあっては戦時

体制という時勢のなりゆきに相反する出版であったことは明らかで、刊行は長崎次郎の英断であった。次郎はこういう点では、兄太郎と同様いごっそうぶりを発揮してやまなかったのである。時局を無視した長崎書店の出版には、他に有賀鉄太郎『オリゲネス研究　神学的解釈学としての』（一九四三・九）、森有正訳『カルヴァン説教集』（一九四三・一一）などがある。

時代の嵐の中で、長崎書店は戦時企業整備令によって一九四四（昭和一九）年三月末をもって業務を停止し、プロテスタント系出版社十社の統合によってできた新教出版社に合併された。長崎次郎はその初代社長として、戦中・戦後の困難な時代に重責を果たすこととなる。新教出版社の戦後の歩みも長崎次郎抜きには語れない。

戦中から戦後へ

弟、長崎次郎が出版という大海で苦労していたころ、長崎太郎もまた京都帝国大学の学生課長として、きびしい時代の中で悪戦苦闘していた。国内新体制運動は、学生の自治組織である学友会・校友会を報国会へと切り替えようとしていた。

京大学生主事としての長崎太郎は、前述のように文部省からのそうした内容の押し付け通牒に接しても、そのまま同意するわけにはいかなかった。彼は学友会の存続を羽田亨学長に申し出、自らは文部省に出頭し、思想局長に会い、これまで学生の自治機関として発展してきたものをなくしては惜しいと説いた。長崎太郎は名称を「同学会」とすることを提案し、文部当局とも交渉して納得させている。精一杯の抵抗であった。長崎太郎にとって暗く、苦しい日々が続く。

一九四一（昭和一六）年十二月八日、日本は英米に宣戦布告をした。日本海軍の真珠湾奇襲勝利のラジオ放送を聴いた時、長崎太郎は思わず「負けた、負けた」と叫び、子どもらを驚かせたという（『佐々木惣一先生と私』）。彼は第一次世界大戦直後のアメリカを知っていた。その無限ともいえる国力もわかっていた。

長崎太郎の在米当時のアメリカは、大戦中に建造した多くの商船の始末に困って、各地の港に繋留していながら、ニューヨークの対岸ロングアイランドのドッグ・ヤードからは、新しい船を毎日進水させていた。長崎太郎には、その光景が特別に印象づけられていたのである。戦争中国民の多くは、大本営の景気のいい戦勝ニュースに踊らされたが、彼には先が見えていた。「船で負ける」と彼が思ったのは、郵船会社勤務の経験からもたらされた当然の帰結であった。彼は次のような歌を残している。

戦勝をラジオは高く報ずれど心乱れてととのへ難し（『山青集』）

戦時中の長崎太郎を慰めたものは、土屋文明に師事しての作歌の試みであった。一九四二（昭和一七）年の夏には、短歌の師となった土屋をアララギ発行所に訪ね、歓談している。その折りの句五首を『山青集』から抜き出し、掲げよう。

雑詠歌集を壁によせ高く積める部屋に団扇（うちは）ふりつつ語りたまふも

君が学校を辞（や）めし昔の物語りしみじみ聞きぬ氷かみつつ

汗しづく開襟シャツを左千夫先生の額（がく）の前にて脱がしめし君

暑き陽にかわかしし吾が開襟シヤツを手づから日影によせたまひし君
君が後を継ぐべき人のなきことを歎かふ年と吾れもなりにし

一九四三（昭和一八）年四月二日、長崎太郎は文部省から高岡高等商業学校（現、富山大学経済学部）校長に任命の知らせを受ける。彼はここに十五年に及ぶきつかった京都大学の仕事から解放されたのである。恩師佐々木惣一と相談した上での受諾であった。佐々木は蘇東坡の詩の一句「独樹花発自分明」を半切に書いてはなむけとして贈った。彼はまず単身赴任し、富山市内の大野屋旅館の客となる。「二階から見える庭の高い木に寒い氷雨がそそいだ」と彼は後年「思い出」（『富山大学経済学部五十年史』（富山大学経済学部、一九七八・八）という回想文に書くことになる。

戦中の高商をめぐる環境は、厳しいものがあった。学生の卒業後の進路は定かならず、在学生は軍事教練に、勤労奉仕にかりだされる日々であった。自ら進んで海軍予備学生や陸軍特別操縦訓練生に志望する者も出る。しかも文部省は、国の戦力増強を図るため、高岡・和歌山・彦根の三高商を高等工業に転換する方針を打ち出していた。こうした時期の長崎太郎の動向を『富山大学経済学部五十年史』は、「長崎校長の就任」と題し、次のように伝える。

昭和十八年四月一日、わが学園ではゆくりなくも熊木校長が更迭され、第五代校長として京都帝大学生主事兼司書官長崎太郎氏を迎えることになった。（中略）同校長は、この期間決戦態勢から学校転換という旋風の中に多事多難な学校行政に直面された。傍ら就任以来仰嶽寮に関心を払い鋭意その精神的訓育方面に力を注いで来られ、新工業専門学校の生徒にも高岡高商以来の輝く伝統をそのまま継承せしめんとの熱心且つ強烈な抱負を示され、変動期にややともすれば自信を喪失し勝ちな学生達への強固な精神的支柱となられたことは、高く評価さるべき功業といわねばならない。

高岡高等商業は一九二五（大正一四）年創立の歴史のある高商だったが、長崎太郎はその学校を高等工業に転換して再出発させなければならなかったのである。が、彼の真価は、時局困難な中にあって、遺憾なく発揮されるのであった。高商の教職員を他の職業に転じさせ、代わりに高等工業教育にふさわしい科学者を教授陣にそろえ、必要な機械・器具類や教具用物資をととのえるのは至難の業であったが、彼はそれを成し遂げた。また、学生の動員先を選ぶために懸命の努力を注いだ。「長崎校長の捨て身の配慮」がそこにあったと『富山大学経済学部五十年史』は伝える。京都大学学生課に十五年もいたことや、それ以前の日本郵船勤務の体験が、この場合有効に働いた。

長崎太郎は一度京都に戻り、京大学生主事官舎の家財道具をとりまとめ、家族と共に夜汽車に乗った。膝の上には蔵書の中で一番大切にしていたウイリアム・ブレイクの版画本の数々があった。高岡に着いたのは、次の日の朝である。「あかときの汽車の窓より先ず見たり二た峰つづく二上の山」の歌が『山青集』に入っている。就任の年、彼は文化講座を二つ計画し、実現している。一つはこの年（一九四三）の十一月二十八日に行った京大教授沢潟久孝の「万葉と

日本精神」、いまひとつは彼の歌の師、土屋文明の「万葉 越中に於ける大伴家持」であった。

一九四四（昭和一九）年四月から、前述のように高岡高商は、高岡工業専門学校となる。文部省がこの年一月三十一日に正式に発表していたのである。長崎太郎は先の回想「思い出」に、「最初、文部省のこの意向を知った時は、一と晩泣き明した。大正十四年開校以来、代々の校長、教職員の苦心経営によってきづきあげられた輝かしい歴史と伝統をもって、創設以来、我国産業界の為めに尽力して、国家に貢献し、戦時下、一層の努力を重ねる事によって、益々向上の一途を邁進し、模範的校風を樹立したとさえいわれた名誉ある高商であるのに、いかに戦時下の要請によるものとはいえ、和歌山、彦根の二校と共に、この転換の運命を見た事は誠に悲しい事であった」と書いている。

高岡時代の長崎太郎を語る二つのエピソードを記しておこう。一つは軍部の横暴で、高岡高商の講堂の明け渡しを迫られた時、御真影を盾に断固拒否したことである。いま一つは高岡工業専門学校が発足直後、生徒の陸海軍の学校に志願するのを禁じたことだ。双方とも気骨ある教育家、長崎太郎の一面を語るものである。後者のばあい、彼は金沢憲兵隊本部に出頭を命じられ、気違いのレッテルを貼られて釈放されたという。これらの事件に遭遇して、彼は常に恩師佐々木惣一の助言を求めている。「思い出」には、このエピソードも書き込まれている。

一九四五（昭和二〇）年四月、長崎太郎は旧制山口高等学校長に転任する。富山での仕事は、わずか二年間であった。空襲下、大陸に近い山口へなぜ転出なのか、と彼は思わざるを得なかったが、佐々木惣一の助言もあって承知することとなる。妻美和と娘文子を伴っての赴任であった。「高岡を去る夕べ」と詞書した二首の短歌が『山青集』に入っている。

人影もなき城跡（しろあと）の濠（ほり）にそふ若葉の道は風まだ寒し
妻と娘と三人（みたり）し去るも城跡の夕べさみしき光のなかを

旧制山口高校の前身の一つ山口高等中学校は一八八六（明治一九）年十一月二十日、文部大臣森有礼の文部省告示によって誕生した。一高、三高に次いでの高等学校開設であった。創設当初の経費は、防長教育会が負担した。国庫補助を受けるようになったのは、一九〇〇（明治三三）年以降のことである。

長崎太郎は、校長としては二回目の赴任であり、新しい抱負を胸に山口駅に降り立った。が、戦争は敗色濃く、国民学校を除いて授業は行われず、勤労動員の時代であった。カラの学校の一角には、新設の師団司令部が駐屯した。苛烈な戦時下、彼はやがてくる新時代の教育を想っていた。

八月十五日の敗戦を、長崎太郎は山口で迎えた。天皇の重大放送は、聞き取り難いものだったが、日本が戦いに敗れたことは理解できた。彼は校長室の廊下に集まって放送を聞いていた学生たちに、ひとこと訓辞した。第二十七回生の岡本裕允は、その日を回想し、「八月十五日は何か重大放送があるというので校長室前の廊下に集まり、聞き取れない放送があった。長崎校長は進駐軍に関しホーソンの「緋文字」を引き、清教徒による米国の精神にふれ、流言に惑わされず諸君は安心して勉学に専心するようにと言われた」（『健児

の胸に燃ゆる火の 旧制山口高等学校開校八十周年記念文集』旧制山口高等学校同窓会、一九九九・一〇）と書いている。

戦後のきびしい生活の中で、彼は山口高校の再建にとりかかった。敗戦の翌年、一九四六（昭和二一）年の二月十二日には、京都から恩師佐々木惣一を呼び、「民意政治の自覚的教化」という講演を実現している。佐々木は敗戦後内大臣府御用係として、近衛文麿とともに帝国憲法改正に携わり、いわゆる佐々木試案を作ったが、これは日の目を見ることなく終わった。

戦後初のこの年の入学試験は、一次合格者の五割が軍学校関係者に占められたという。『佐々木惣一先生と私』には、「高岡工専で、生徒が軍の学校に転ずるのを拒んで問題を起した私は、終戦後は反対に、軍にあった青年を出来るだけ多く山高に収容した」とある。

戦後はアメリカ駐留軍（占領軍）との関係が難しかった。山口にもアメリカの軍隊が進駐してきて、ジープが町々を走り回った。旧制山口高校には、進駐軍が学校視察の名目でやって来た。昼時になると昼食を出すが、校長の長崎はビールを出すことをしなかった。代わりにコップに水を入れて出した。けげんな顔をする兵隊には、英語で「第一次世界大戦後のアメリカは、戦時中から続いていた禁酒（プロヒビション）を断行していた」と逆に説教をしたという。

『柳桜をこきまぜて―旧制山口高等学校外史―』（旧制山口高等学校同窓会鴻南会、一九九四・七）の卒業生座談会に岡崎虎雄（教官）が以下のように語っている。

長崎さんは若いときに郵船なんかにおられたこともあって、非常に企業的な才覚に優れていた。だから、占領軍がやって来たときも、とても交際がうまくて感心させられたですね。長崎さんがいたから山高では占領軍とのトラブルは起きなかったけれど、高商のほうではトラブルが起き、校長がクビになった。二十四時間以内に山口を退去せよっていう命令を受け、昼夜兼行で荷物をつくって、やっと間に合わせた。しかも、それに連座して教官が五人も追放になるというような大ごとが起こっています。

若き日のアメリカ・ニューヨーク滞在は、決して無駄ではなかったのである。特に身についた語学力は、彼の武器となっていた。アメリカの将兵とは、直接英語で話を交わした。敗戦直後の旧制高等学校は自由を謳歌していた。が、間もなく山口高校に学校ストライキが発生する。長崎太郎は『佐々木惣一先生と私』の「自治の育成」の章に、「私は生涯の間にストライキに何度か関係した。しかし、学校ストライキについては、第一次大戦後の最大のストライキである第二高等学校ストライキと、第二次大戦直後の最大のストライキである山口高等学校ストライキとは忘れがたいものである」と記している。前者は当時武蔵高等学校生徒課長であった長崎が、校長山川健次郎の要請を受けて仙台に行き、関係各方面と折衝しストを解かせたものである。後者は自身が校長をする学校の事件だっただけに、解決は難しく、より深刻なものがあった。

一九四八（昭和二三）年の旧制山口高等学校の激しいストライキに関しての長崎側資料は、これまた『佐々木惣一先生と私』に見出せる。太郎はそこで「生徒はややもすると外部の勢力に乗ぜられ、群集心理やヒロイズムに引きずられながら、みずからはそれを知ら

ず、あたかも自己の信念によって行動しているかのような錯覚を起し、また悪意でないエゴイズムに走りやすい。これに対して、細心の注意と、強力で永続的な啓蒙と、寛厳時にかなった教育的措置をとることは、まことに至難であった」と記している。

一方、『柳桜をこきまぜて―旧制山口高等学校外史―』には、「卒業生座談会」として旧制山口高校時代のストと長崎太郎のことが出て来る。この本の「旧制山高の幕閉じる」の章に載っている日笠山慶尚という第二十八回文甲の学生の発言を引用しよう。

私たちが三年生のとき、一年に三回くらいストライキやっているんですよ。あれを起こしたのは、文甲の三年。一番最初のストライキは、校長が自治会をつくらせなかったのを「けしからん」というんで。夏だったような気がしますね。結局、自治会ができて私は文化部長にさせられちゃった……。

そのあと、二回目のストライキのときはちょっと覚えてないんですが、三回やったことは覚えてるんです。最後に例の長崎校長追放のストライキになっちゃったわけです。全学連で、東大が中心になって、武井昭夫や安藤仁兵衛たちが指導してたんです。大学の学制改革、アメリカの言うなりになるのはけしからんというわけ。要するに反米闘争の一貫なんです。

リベラリスト長崎太郎は、戦後、解放感をいだいたものの、それも束の間であって、彼は新たな学生運動にてこずることとなる。彼は筋を通すことを信条としており、時にそのいごっそうぶりは、学生と激しく衝突する。右の『柳桜をこきまぜて―旧制山口高等学校外史―』の座談会には、「長崎校長とストライキ」の項もあるので、そこの箇所全文を引用しよう。長崎太郎の言い分は『佐々木惣一先生と私』にくわしいので、ここはあえて長崎と対立した教官と学生の見解に耳を傾けよう。

司会　話題を長崎校長の時代（二〇・四～二四・六）に移しますが、山田さんたちのときは特にストライキ問題が大きな話題になると思いますが……。

山田　最初は例の砂糖休暇に関連したことからですね。

司会　二十三年の五月十七日から一週間砂糖休暇があったが、六月になって食糧事情悪化のため、一学期の期末試験を二学期初めに実施するよう生徒の要求が提出された。これに対して教授会では、延期を認めないで実施することを決定した。

それで生徒のほうはさらに要求し、これに対し学校は逆に五日間休校した。そして結局、生徒の要求をいれ、期末試験を二学期初めに延期することに決定した。ということで、このときはストライキにゆかずに解決した。

山田　そうですね。

司会　二学期になると自治会が誕生し、十二月にストライキをやっている。そして長崎校長の即時退職を要求しています。

試験が間近になった十二月十四日、自治会が山口署に校長を告発し、これに対し学校側は、翌日、七名の生徒を謹慎処分にした。最終的には翌二十四年一月、放校七名、

諭旨退学三名という処置を取ったというんですがね。

岡崎　六月のときはうまく回避できたんだけど、そのころから既に十二月のことが起こる底流がありましたね。私の見ているところでは、共産党の県の委員会か何かからはっぱをかけられていたんじゃないかと思うんです。山口三太郎といって、三人の反動分子がいるというわけです。山口市長の山下太郎さん、山口県知事の小沢太郎さん（第6回文甲）、それに山高校長の長崎太郎さんです。それほど反動的とは思えませんがね。それで長崎校長は、そういう連中から「時あらば……」と狙われていたんじゃないかと想像しますけれどね。

山田　それだけに六月のときは私も交渉委員に選ばれて一生懸命やったけど、十二月のときは完全に割れてしまった。私は反対の立場に立ったんですが、少数派でした。ストライキ反対の同盟をつくって積極的に意思表示はしたんだけれど、決議ではストライキ宣言が採択されてしまった。

浜田　私は山田君の一年前で寮の委員をしていたが、スクラム組んでインターナショナルを歌うんで、なんか時代が変わったという感を深くしたね。なにか昔の高等学校とは違ったにおいを感じたし、ストライキが起こったとき、なるほどと思いました。

それから、私は、長崎校長の息子さんの長崎陽吉君と同じクラスにいたし、長崎校長の前任地が富山県の高岡で私が富山県出身だったことから、ときどき校長のお宅に遊びに行っていた。それで長崎校長の人となりを、割方よく知っているんです。

長崎校長は随分頑固なところがあって、時に柔軟性を欠いてパーンとぶつかるところがあるんです。

岡崎　非常に強いところがありました。

右の座談会には、敗戦後の混乱期の山口高校を率いた長崎太郎の功罪を、いろいろの角度からさまざまな人が回想している。「有能」「腕利き」「強力なコネを持つ」「決断が早い」「頑固」などのことばが出て来る。ならすと功が罪を上回る。彼はリベラリストであり、同時にいごっそうの性癖を持ち合わせていた。彼は生徒委員とも交渉に応じ、朝の二時までヘトヘトに疲れながら対応した。が、ストは一九四八（昭和二三）年十二月には大学法反対スト、試験拒否へと進む。長崎太郎の心労はいかばかりであったか、思いやることができる。彼は学府の権威を貶めたくはなかった。年を越した一九四九年一月、スト態勢の続く中で、彼は決断する。最終処分は一月十五日の教官会議を経、放校一名、諭旨退学十一名であった。かくて山高の学生ストは終結する。

長崎太郎は孤立無援の中で、ストに対さなければならなかった。が、教育者としての長崎太郎は熟慮断行、しかも強い反対にあっても、後へ引かない面があった。それは父文之助ゆずりの性格でもあった。処分の反応を、長崎太郎は『佐々木惣一先生と私』に以下のように書いている。

処罰発表の晩、古本屋白玉書房の主人堀口正義さんが、「こ

の騒ぎではあぶない。今夜は泊まらせていただきます。」と来てくれた。私は、断じてそんなことはない、あっても大丈夫、と固辞したが、ついにその夜は長鬚のおっさんと枕を並べて寝た。しかし、無論何のこともなく夜が明けた。

それ以後、被処罰生徒は、一人々々静かに対話することを避けて常に団体を組んで行動し、下駄ばき、マントのままで青共員や外部党員とともに大挙して校長室に押し寄せ、あるいは教官会議の席に闖入して、処罰の理由不明なりと怒号して議事を妨害し、あるいは交渉委員と称する生徒らと手分けして、他校の自治会や校外各種団体などに働きかけ、処罰の撤回、軽減、交渉会の開催などの実現を百方努力したが、学校は処罰の一線だけは断じて譲らなかった。学校は、生徒が真に高校生の面目に立ちかえってくれれば、誠意をもって面談するにやぶさかでなかったが、遺憾ながら、これまでの経過から、およそ人間の誠意と誠意とが相通う状況からはよほどの距離があるものと断じないわけにはゆかなかった。

かくして一月十二日から授業ははじまり、二十四日からは平静に臨時試験も施行された。とにかくストは何とか乗り越えた。彼は孤独であった。事なかれ主義はダメだ。断固たる態度が必要との考えが彼にはあったからだ。そのため、時に事は荒立つが、収拾は早い。

スト騒ぎの中にあって、彼は同時並行的に山口高校を県下の他の専門学校・師範学校・獣医畜産専門学校と合体させ、大学に昇格させることに奔走しはじめていた。その過程で彼は、一高時代の旧友であり、歌の師である土屋文明を新制の山口大学に教授として招聘しようとの夢を懐いていた。

土屋文明と山口大学のことは、宮崎荘平の「土屋文明と「山口のこと」—新制山口大学への赴任勧誘をめぐって—」（『國學院雑誌』第一〇七巻第五号、二〇〇六・五）にくわしい。それによると、発端はストのあった年、一九四八（昭和二三）年三月末の長崎太郎からの一通の便りにあった。敗戦後しばらくは、電話は各家庭に普及しておらず、重要用件は手紙に書くのが普通であった。その便りには、翌年開学予定の新制山口大学へ来ないかということが記されていた。当該書簡は未だ実物は確認されていないが、骨子は山口大学への招聘伺いであった。それは長崎太郎宛文明の返信で確認できる。

長崎太郎宛返信（『土屋文明書簡集』収録、一九四八・四・五付）には、「木のコッパにも足らぬ老生のためご配慮下さることいつもながらの御芳志ただただありがたし実際僕の如きヘンパな人間がお役にたつかどうかその点は全く不安なれど僕としては実にありがたいことだと思つております」とある。土屋文明はその頃万葉集注釈をライフワークとし、「落ちついて仕事のできる場所」を探していたのである。

長崎太郎の『佐々木惣一先生と私』には、「私は、文理学部国文学科の教授に土屋文明君を招くことを思い立ち、交渉を重ねて、やっとこの懇願を承諾してもらった」とある。当時は未だ占領下である。GHQからは二年前の一月に、公職追放令が出ていた。文明は戦時中日本文学報国会に所属しており、それが公職追放の材料にならなければと、太郎は心配した。宮崎荘平が先の論文で引用している一九四八（昭和二三）年五月十四日付の文明の長崎太郎宛書簡は、そのことにふれている。そこでは文学報国会は追放事例にはならない

という釈明と、それよりも短歌雑誌『アララギ』の選歌と編集の仕事が離れがたいのが、障害だと記している。また宮崎の調査では、文明の「自筆履歴書」には、「二三年一二月一一日、大学設置審議会特別委員会に於て教授と判定せらる（国文学・国文学概論）」と記されているという。そうすると履歴書を提出、教授判定まで受けていたことになる。

土屋文明は生活を安定し、万葉集注釈に打ち込むためにも山口行きに心が揺れた。が、大学昇格を準備しながら、山口高校は前述のストに突入、しかも、長崎校長反対運動もストの一因というニュースも伝わり、文明は迷ってしまう。長崎太郎がいるからこその山口行きである。長崎が新制山口大学の学長にならないなら、彼は行きたくないと思うようになっていた。そして長崎には、辞退の意志を告げるようになる。

だが、宮崎荘平の「土屋文明と「山口のこと」—新制山口大学への赴任話をめぐって—」によれば、山口のアララギ会員友廣保一宛の便り（一九四九・五・七付）に、「いよいよ行くとなれば小市夫妻を助手として同道することにしようかと思つて居ります」と書くところからして、一九四九年の春までは、山口行きを依然期待していたのではないかという。宮崎の説明によれば、「小市夫妻」というのは、文明の長女草子（かやこ）と、その夫・小市巳世司（こいちみよし）である。巳世司は文明の歌の弟子である。手紙では小市に中学か高等学校での嘱託教員の口を考えて欲しいと書いているのだ。こうしたことからして、宮崎は「赴任辞退の意思表示は、謙遜と遠慮から出たもので、本心は教授就任、山口赴任であったのではなかろうか」とする。

他方、長崎太郎は「土屋文明氏と私」（『高知アララギ』一九六四・七～九）に、一高時代の友人で、今や自分の歌の師でもある土屋文明を、新制山口大学に招こうとした経緯をくわしく書き留めた。それによると、土屋は長崎の熱心な勧めで、いったんは山口行きを決心したものの、結局は長崎が山口高校を大学に昇格させた後、京都市立美術専門学校に転じたことから実現しないで終わったという。「君が山口大学をやめるなら、僕も行くことをやめる」と土屋文明からは言ってきた。宮崎荘平の引用する一九四九（昭和二四）年五月二十六日の友廣保一宛書簡に、「お手紙電報ありがたう存じました。長崎氏はひそかに憂慮した如くやめられし由。従って僕の山口問題も終末を告げました」とあるのをもって、一件は落着する。が、晩年の長崎と土屋文明とは、以後も歌を介した深い交わりがつづく。

春が訪れ、次節で詳説する新しい任務である京都の地へ移る前に、長崎太郎は右のアララギの歌友、友廣保一らと秋吉台へ吟行に出かけている。秋吉台は山口県の西部にある国定公園である。太郎は一度は訪れてみたいと前々から考えていた。そこは若き日、一高時代の旧友佐野文夫が更正の道を歩むため、クリスチャンの本間俊平の指導のもと、石切の作業に従った地である。太郎は秋吉台というと今は亡き若き日の友人を思い出すのが常であった。

時は春、小笹の中に群がり立つ石灰石の影に花が咲き誇るのを見て、太郎は「小笹生（をざさふ）に群立（むらだ）つ岩は鋭くて疲れし腰をおろすすべなし」と歌い、さらに「青年佐野文夫が石を切りたる台地かや吾れ五十八にして疲れつつ歩む」（『山青集』）と詠んでいる。若き日の友の思い出は、かすみつつあった。それに彼は少し疲れていた。太郎は『佐々木惣一先生と私』に、「この吟行は、私には、やがて別れる山口の、その春を惜しむ下心もあった」と記している。